



アイデンティティの柔軟性と重層性に関する研究
—東アフリカの牧畜社会における他者と自己の構築

Construction of Self and Others
in the East African Pastoralists' Societies:
Flexibility and Plurality of Identities

中村 香子 Kyoko Nakamura
内藤 直樹 Naito Naoki

Kyoto Working Papers on Area Studies No.69
(G-COE Series 67)

March 2009

このグローバル COE ワーキングペーパーシリーズは、下記 G-COE ウェブサイトで閲覧する事が出来ます
(Japanese webpage)

http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/staticpages/index.php/working_papers

(English webpage)

http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/en/staticpages/index.php/working_papers_en

©2009

〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学東南アジア研究所

無断複写・複製・転載を禁ず

ISBN978-4-901668-65-1

論文の中で示された内容や意見は、著者個人のものであり、
東南アジア研究所の見解を示すものではありません。

このワーキングペーパーは、JSPS グローバル COE プログラム (E-4) :
生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点 の援助によって出版されたものです。

アイデンティティの柔軟性と重層性に関する研究
ー東アフリカの牧畜社会における他者と自己の構築

中村 香子
内藤 直樹

Kyoto Working Papers on Area Studies No.69
JSPS Global COE Program Series 67
In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa

March 2009

アイデンティティの柔軟性と重層性に関する研究*

ー東アフリカの牧畜社会における他者と自己の構築

中村香子**、内藤直樹***

Construction of Self and Others in the East African Pastoralists' Societies: Flexibility and Plurality of Identities

Kyoko Nakamura, Naito Naoki

The purpose of this study is to clarify the process of the construction of flexibility and plurality of identities by examining representation or interpretation of the cultural differences inside one ethnic group and between ethnic groups in the East African Pastoralists' Societies. Generally construction of self identity and construction of others are two sides of the same coin, and they thus proceed at the same time.

In this study to clarify the logic people are using when they construct identities two main points are focused upon. Nakamura examined the cultural and social practices related to the age system among the Samburu people mainly focusing on the “moranhoo” which is the age grade of unmarried male (*moran*) sometimes translated as “warriors.” A regional difference between the general view of moranhoo of highland and lowland of has become conspicuous. This difference makes both highlanders and lowlanders conscious of what they chose, and their identities as moran are defined differently. Naito examined the dynamics of the inter-ethnic antagonism and its practical solutions among the Rendille and Ariaal people in northern Kenya in relation to the decentralization and democratization of the Kenyan nation.

The first clarifies the process of the construction of the different identities inside the ethnic group, and the second clarifies the process of the essentialization of the ethnic group over the political resources. In short, it is a process of reorganizing a group, within which many minute differences are contained, which becomes a monolithic and monotonous group.

1. 本研究の位置づけ

* この論文はGlobal COE Program「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」次世代研究イニシアティブ・研究助成による共同研究にもとづいている。

** 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、研究員(nakamura@jambo.africa.kyoto-u.ac.jp)

*** 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、研究員(naito@jambo.africa.kyoto-u.ac.jp)

東アフリカの牧畜社会は、絶えず民族間で家畜の奪い合いを行う好戦的な人々であるといわれている一方、その帰属意識の柔軟性においてもよく知られている。彼らの柔軟なアイデンティティのありかたの背景には、人々が生活の拠点を臨機応変に移動させ、多様で広範な生態環境を利用したり、旱魃や牛疫、民族間紛争といった緊急時には集団を離散させて対応するという牧畜経営の特質が指摘されている（Schlee 1989）。また、これらの社会の多くは「年齢体系」という社会システムによって統合されているが、それぞれの社会がもつ年齢体系における類似性は、共通の文化的アイデンティティとなって民族間を友好的に結びつけることもあれば、逆に、紛争時には軍事モデルとなって暴力を発動する枠組みとなることも指摘されている（Kurimoto 1998）。

一般的に、他者の構築と自己のアイデンティティの構築は表裏一体をなし、同時に進行すると考えられるが、本研究では東アフリカの牧畜社会を事例に、民族の内部や民族間の文化的な差異の表象や解釈の過程を分析し、「移動」を常態とする人びとの民族アイデンティティに柔軟性や重層性が創出される機序を解明することを目的とする。

個人や集団が、さまざまな場面において、どのようなロジックを用いながらアイデンティティを構築しているのかという問いを解明するために、本研究は次の二点に注目した。第一には、年齢体系という在来の社会システムのアイデンティティの構築基盤としての役割、第二には、国会議員の選挙というナショナルなイベントにおける民族やクランのアイデンティティの再構築の過程である。第一点からは、民族の内部で異なるアイデンティティが構築される過程を解明し、第二点からは、政治的資源をめぐってアイデンティティが本源化される過程を解明した。これらは、すなわち、本来は微細な差異を多く含んでいる集団が、一枚岩的な集団に分割・再編される過程の解明であったと言えるだろう。

調査地は、ケニア共和国サンブル県とマルサビット県であり、調査対象はマー系のサンブルと、レンディーレとサンブルの境界域に居住するアリアールである。アリアールはクシ系のレンディーレとサンブルの混成集団である（図．1）。



図1. サンプルとアリアールの居住地

2. アイデンティティ構築基盤としての年齢体系（中村香子）

2-1. サンプルにおける年齢体系

本節では、ケニアの中北部に居住するウシ牧畜民サンプルを事例に、アイデンティティの構築基盤としての年齢体系の役割を明らかにする。年齢体系とは、人々をいくつかの年齢範疇に分類し、それぞれに特定の社会的な役割や行動規範を付与するシステムである。こうしたシステムを有する社会は世界のさまざまな場所でみられるが、なかでも東アフリカの牧畜社会には年齢体系をもつ社会が多く分布しており、社会の主要な統合原理のひとつとして機能してきたことが知られている。年齢体系は、人びとの社会関係を調整し構造化するだけでなく、個々人の人生観や世界観を規定するものとなっている（e.g., Gulliver 1968）。そしてまた、一定の期間を経るごとに新しい年齢組が形成され、人びとの社会的な地位が年齢体系に沿って変化することを象徴する儀礼のサイクルが存在することをおして、人びとの時間の感覚が秩序づけられていることも報告されている（e.g., Baxter and Almagor 1978）。

サンプルは、東アフリカの牧畜社会のなかでも年齢体系をつよく維持してきた社会といえる。サンプルの年齢体系は、男性を「少年」「モラン」「長老」という3つの階梯に分ける。「少年」とは誕生から割礼までを、「モラン」とは割礼から結婚までを、「長老」とは既婚男性すべてを指す。「モラン」とよばれる未婚の青年期は、多くの規則にしばられる時期であると同時に華やかに着飾りダンスや恋愛を謳歌する時期でもある。男性は、モランとなる割礼によって年齢組に加入する。モラン階梯はひとつの年齢組から、長老階梯は複数の年齢組からなっており、約14年に一度の新しい年齢組の発足によって、それまでモラン階梯にあった年齢組は長老階梯へと移行する。1990年から2005年まで、モラン階梯にあったのはモーリ年齢組だったが、2005年にキシヤミ年齢組を組織する割礼が開始されたことによって、モーリ年齢組は長老階梯へと進んだ。この期間、長老階梯にあったのは、キリアコ年齢組、メクリ年齢組、キマニキ年齢組、キチリ年齢組、クロロ年齢組である。

このように、人びとが同時に割礼をうけ、結婚するといったライフコースをたどることは、年齢体系において重要な実践である。しかしながら近年では、年齢体系の規範からの逸脱行為が増加している。本論では、人びとの割礼と結婚の時期に注目しながら分析をすすめていく。

2-2. 「モラン」という存在

サンプルについて先駆的な研究をおこなったスペンサーは、サンプル社会を長老にすべての権威が集中した長老制であるという見方をした。すなわち、「長老は、すべての意味のある（significant）ことに対する決定権をもち、モランを未熟者として扱う。そしてモラ

ンはさまざまな逸脱行為をおこなうが、これらは結局のところ意味のない (innocuous) 行為でしかない。長老は家族と集落の中心にあるのに対して、モランは周縁にあって「森」とつながりをもつ。長老は、平和と協調、討論の調停、巧みさ、儀礼的な統制といったものに重きをおいているのに対して、モランに貼られているレッテルは、放浪、身体的な力の主張、虚勢、見栄の誇示、そして最終的には儀礼的な服従であり、両者は明確な対比をなしている (Spencer 1965, 1977)」とした。スペンサーが、このように極端に長老の行為とモランの行為を「意味がある」と「意味のない」ものに区別したことの背景には、彼が、サンプルの年齢体系を「長老の一夫多妻を可能にするためのシステム」(Spencer 1965: 95-97; Spencer 1976: 155-156) であると位置づけたことによる。

男女の数が等しい社会において、一夫多妻の実現するためには、結婚できない男性が多数存在しなければならないが、サンプルでは、この役割をモランが担っているというのがスペンサーの見方である。青年の結婚の時期を20代後半から30代前半まで引き延ばすことによって、男性の結婚年齢は女性のそれよりも約15才高くなり、結婚可能な女性の数は結婚可能な男性の数に対して多く存在するようになる。このことによって一夫多妻が実現するというわけである。たしかに、少年の割礼とモランが結婚を開始する時期は、長老がそのすべてをとりしきる儀礼によって決定されるため、青年がモランである時期は、長老にコントロールされているということができる。モランは、独特の派手な装飾品をつけ、未婚の娘とともにダンスと恋愛を謳歌するが(中村 2004)、個人の判断で結婚の時期を決めることはできず、食事も集落でとることはできない。彼らは年齢体系の規則につよくしばられた不自由な存在であるという見方もあるだろう。しかしながら、モランが飢えや疲れを女性や長老に見せず、集落内の食糧をめぐる争いから退くことは、同時に、彼らの威信やプライドをつよく支えてもいる。

しかしながら、近年は、モランである期間に出稼ぎや学校教育の経験をもつものも多く、また多くのモランが家畜売買の仕事に参入しはじめている。なかには出稼ぎ先の観光地で知り合ったヨーロッパ人女性と結婚したり、ハリウッド映画に出演した経験をもつものまでいる (Kasfir 2002, 2004)。「伝統的」な行動規範にしばられ、派手なビーズ装飾を身につけたモランは、一見するともっとも「伝統的」な存在であるが、実は変容の最前線にあり、「モランであること」に対する人びとの価値観は、さまざまに多様化している。

2-3. サンプルの地域的分節：「高地」と「低地」

サンプルの人口は約15万人であるが、その多くはケニア共和国のサンプル県に居住している。サンプル県には、大地溝帯がとおっている。このために、土地は、その底に位置する低地(標高：500-700メートル)と高地(標高：1800-2000メートル)のふたつの種類に大きく分けられる。年間降水量は、低地では200-250mmであるのに対して、高地では500-700mmである。暑く乾燥した低地では牧草地をもとめて移動性の高い牧畜がいとなまれている

一方、高地ではあるていど降雨にめぐまれており、どちらかと言えば定住的な牧畜が営まれている。定住という生活スタイルは学校教育や開発プロジェクトと結び付きやすく、学校やプロジェクトは高地に集中する傾向がある。低地と高地という生態学的な差異が、社会・経済的な差異を創出しており、人びとも、低地と高地を *Ipurker*, *Idoinyo* という民俗カテゴリーで呼び分けている (Holtzman 1996, 2004)。さらに、1991年に高地に大規模な家畜マーケットができたことにより (Konaka 1997)、高地と低地の社会・経済的な環境の差異が増大した。本稿では、この差異を分析の指標に用いる。

2-4. 割礼をめぐる変化

まず、「モラン期の入り口」である割礼の時期の変化をみていきたい。ひとつの年齢組 (エイジセット) は、割礼の時期によってサブ・エイジセットにわかれる。「モリジョイ」とは年齢組が組織されるときに、集団割礼でモランとなったものをさし、「バルノッティ」とは、すでに組織されている年齢組に遅れて加入したものをさす。遅れて年齢組に加入してくるバルノッティはさらに割礼の時期によっていくつかのグループにわかれる。モリジョイはバルノッティのグループごとに、ちび、おなら、鳥、などといった、見下したニュアンスを含んだあだ名を与える。

モランの生活全般においてバルノッティはモリジョイのつよい統制下におかれ、伝言、買い物、水汲み、薪集めなど、はバルノッティの仕事である。また、“*Meata Ibarnot lomon obore* (バルノッティのしゃべることが成熟することはない)” ともいわれ、バルノッティはモリジョイからばかにされた存在である。このため、父親たちはできれば自分の息子をモリジョイにしたいと考えてきたし、少年たちもモリジョイになることを望んできた。しかし、このためには、約14年に一度の集団割礼を待たねばならない。

表2-1はモリジョイとバルノッティの比率をモーリ年齢組からキマニキ年齢組までの過去4つの年齢組にさかのぼって示したものである。1948年に組織されたキマニキ年齢組と、1960年に組織されたキチリ年齢組では、モリジョイになるひとが全体の7~8割をしめていた。しかし、この割合は減少傾向にあり、とくに1990年に組織されたモーリ年齢組の高地居住者では、モリジョイが46%、バルノッティが54%で、バルノッティがモリジョイの数をしのぐに至った。これに対して、低地では、モリジョイが70%、バルノッティが30%と従来どおりの割合を示している。

また、図2-2では、左上が1948年に組織されたキマニキ年齢組、右上が1960年に組織されたキチリ年齢組、左下が1976年に組織されたクロロ年齢組、右下が1990年に組織されたモーリ年齢組を示しています。棒グラフの緑は年齢組が組織されたときに集団で割礼を受けたモリジョイ、薄いきいろはバルノッティだが、キマニキとキチリ年齢組ではバルノッティの割礼は、ふたつの時期に集団で行われている。しかし、下のふたつ、クロロ年齢組とモーリ年齢組では、バルノッティのグループの数が10以上と著しく増え、それぞれ

のグループの構成員の数が減少している。すなわち、最近のふたつの年齢組では、バルノッティの割礼の機会が増加している。さらに、もう一点、注目すべきは、バルノッティの名前である。クロロ年齢組とモーリ年齢組の構成は同じように見えるが、クロロ年齢組では、縦軸に示したようにバルノッティのグループのそれぞれに異なる名前が与えられていたが、モーリ年齢組では、すべてのバルノッティのグループに同じ名前が与えられている。これは、バルノッティのグループの数が増加しすぎた結果、人びとがそれぞれのグループに名前をつけて識別することをやめてしまったためであると考えられる。

さらにモーリ年齢組の人びとの割礼の時期を高地と低地に分けてみると（表2-2）、バルノッティの割礼の機会は高地で増加しており、8つにわかれている。すなわち高地では、多くの人びとが個人的に割礼をおこなったことがわかる。これに対して、低地では、個人で割礼をおこなったのはふたりのみで、大多数の33人は集団で割礼を受けている。このことから、バルノッティのサブ・グループの分裂は高地で顕著におきている現象であると言える。

表2-1. 「モリジョイ」と「バルノッティ」の比率

単位：（％）

調査地		モーリ年齢組 (A: N=113) (B: N=84) (C: N=119) (計: N=316)	クロロ年齢組 (A: N=46) (B: N=86) (C: N=77) (計: N=209)	キチリ年齢組 (A: N=47) (B: N=43) (C: N=60) (計: N=150)	キマニキ年齢組 (A: N=21) (B: N=26) (C: N=61) (計: N=108)	合計 (A: N=227) (B: N=239) (C: N=315) (計: N=781)
調査地A (高地)	モリジョイ	46.0	56.5	72.3	81.0	56.8
	バルノッティ	54.0	43.5	27.7	19.0	43.2
調査地B (低地)	モリジョイ	67.9	77.9	53.3	57.7	66.1
	バルノッティ	32.1	22.1	46.5	42.3	33.9
調査地C (低地)	モリジョイ	70.6	77.9	63.3	70.5	71.7
	バルノッティ	29.4	22.1	36.7	29.5	28.3
合計	モリジョイ	61.1	73.7	63.3	65.7	65.4
	バルノッティ	38.9	26.3	36.7	34.3	34.6

表2-2. モーリ年齢組の「バルノッティ」のサブ・エイジセット名と割礼年

割礼年	調査地A (高地)		調査地B (低地)		調査地C (低地)		計
	サブ・エイジ セット名	人数	サブ・エイジ セット名	人数	サブ・エイジ セット名	人数	
1990	(モリジョイ)	52	(モリジョイ)	57	(モリジョイ)	84	193
1991	Jusui	3					3
1992			Jusui	5			5
1993	Jusui	5	Jusui	8			13
1994							
1995	Jusui	36	Jusui	8	Jusui	33	77
1996	Jusui	1	Jusui	3			4
1997	Jusui	10			Jusui	1	11
1998	Jusui	4	Jusui	1	Jusui	1	6
1999	Jusui	1	Jusui	1			2
2000							
2001							
2002	Jusui	1	Jusui	1			2
2003							
人数の合計		113		84		119	316

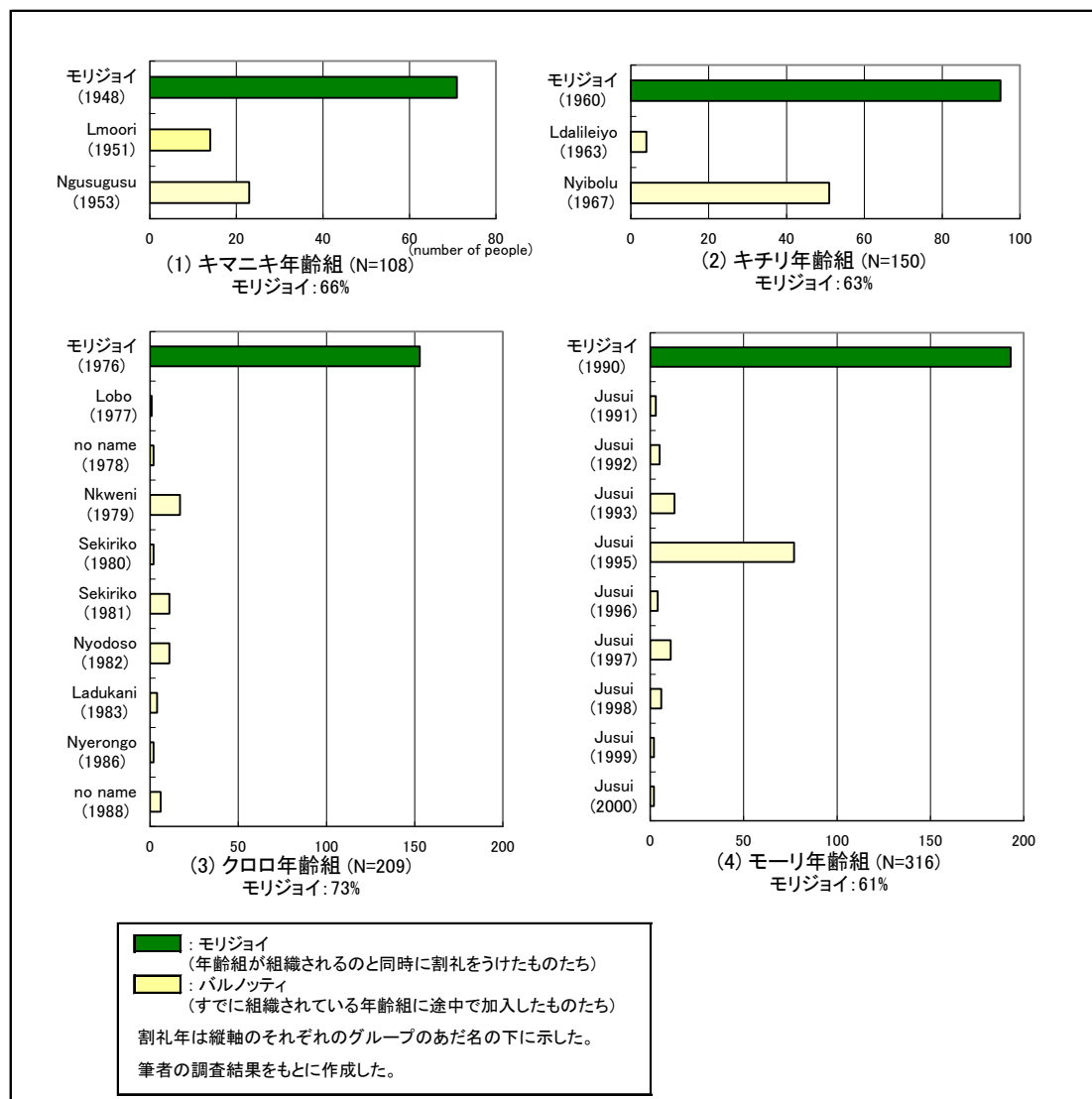


図2-1. サブ・エイジセットの構成:キマニキ年齢組からモーリ年齢組

2-5. 結婚をめぐる変化

つぎにモランの結婚について検討する。モランは種ウシのルムゲット (*Imuget la laigoni*) とよばれる儀礼を終えるまで結婚することが許されていない。この儀礼は通常は年齢組が組織されてから約12年が経過し、次にモランとなる年齢組の集団割礼が近づいた頃に行われる。この儀礼を待たずに結婚する場合は、クランごとにひとりずつ存在する年齢組のリーダーにペナルティとしてウシを1頭支払わねばならない。

表2-3はこの規則に反して早期に結婚したモランの割合を示している。これを見ると、早期結婚を選択したモランの数は、高地では、クロロ年齢組で13%、モーリ年齢組で38%と増加しているが、低地のクロロ年齢組では0%、モーリ年齢組では9%であり、ここでも高

地と低地の地域差が顕著である。注目すべきは、高地のモランは規則をやぶって早期に結婚した理由として、モランを「時間の無駄」だと言い始めたことである。モランであるかぎり、家庭をつくることも、自らの家畜群を築くこともできない。そういう状況を打開するために規則をやぶってでもはやく結婚する青年たちが登場したのである。そして、彼らの結婚を可能にした背景として、彼らの多くが牧畜業のかたわらに家畜売買の商売をはじめていたことが挙げられる。この商売は、うまくいけば出稼ぎとは比較にならない金額を稼ぐことができ、彼らは父親やオジなどの支援がなくても、自力で婚資のウシを調達することが可能になったのである。

表 2－3．規則に反した早期結婚の割合

	モーリ年齢組 調査地 A (N=113) 調査地 C (N=116)	クロロ年齢組 調査地 A (N=46) 調査地 C (N=61)	キチリ年齢組 調査地 A (N=47)	キマニキ年齢組 調査地 A (N=21) 調査地 C (N=54)
調査地 A (高地)	38%	13%	4%	14%
調査地 C (低地)	9%	0%	—	0%
(—：データなし)				

2－6．モラン期のあり方の地域的な差異

図 2－2 には、高地と低地のそれぞれ約112名のモーリ年齢組の男性の割礼から結婚までの時間（すなわちモラン期）を青線で示した。縦軸はモラン個人を示し、横軸はモーリ年齢組の集団割礼がおこなわれた1990年から、2003年の種ウシのルムゲット（結婚開始儀礼）を経て、つぎのモランとなる年齢組が組織された2005年までを示している。高地では、モランの割礼と結婚の時期にかなり個人差がありばらつきがあるが、これに対して低地のモランは、割礼も結婚も比較的同時におこなったことが明らかである。

私がサンプルで調査を開始したのは1998年からであり、モーリ年齢組のモラン期の後半にあたる。この期間は、とくに高地と低地ではモランのあり方の違いが明らかだった。高地では年齢組を統率すべきモリジョイがつぎつぎに結婚して行き、「高地にモランはいない」と人びとが言うほどだった。高地では、「はやく割礼・結婚をしたい」という人々が多く、これらの人々のあいだには「モラン期は時間の無駄」であるという新たな価値観がうまれていたのである。彼らは、はやく結婚して家畜群をはやい時期に形成しようとする志向をもっていた。こうした人びとは、割礼と結婚の時期を、年齢体系の規則にしばられずに個人的に決定することにより、自分がいつどのぐらいの期間をモランとして過ごすかをコントロールしていると見ることができる。これに対して、低地では、「高地のモランのふるまいは汚れている」「自分達こそ真のモランだ」という言説をしばしば耳にした。彼ら

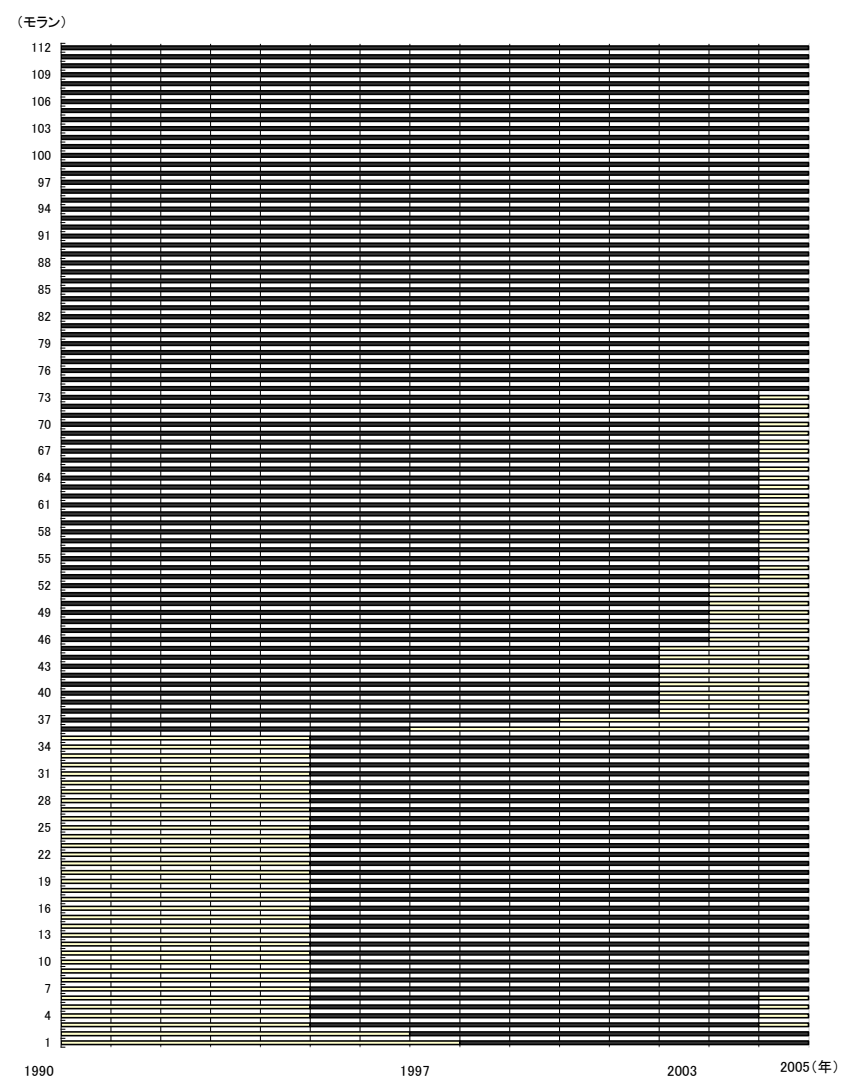
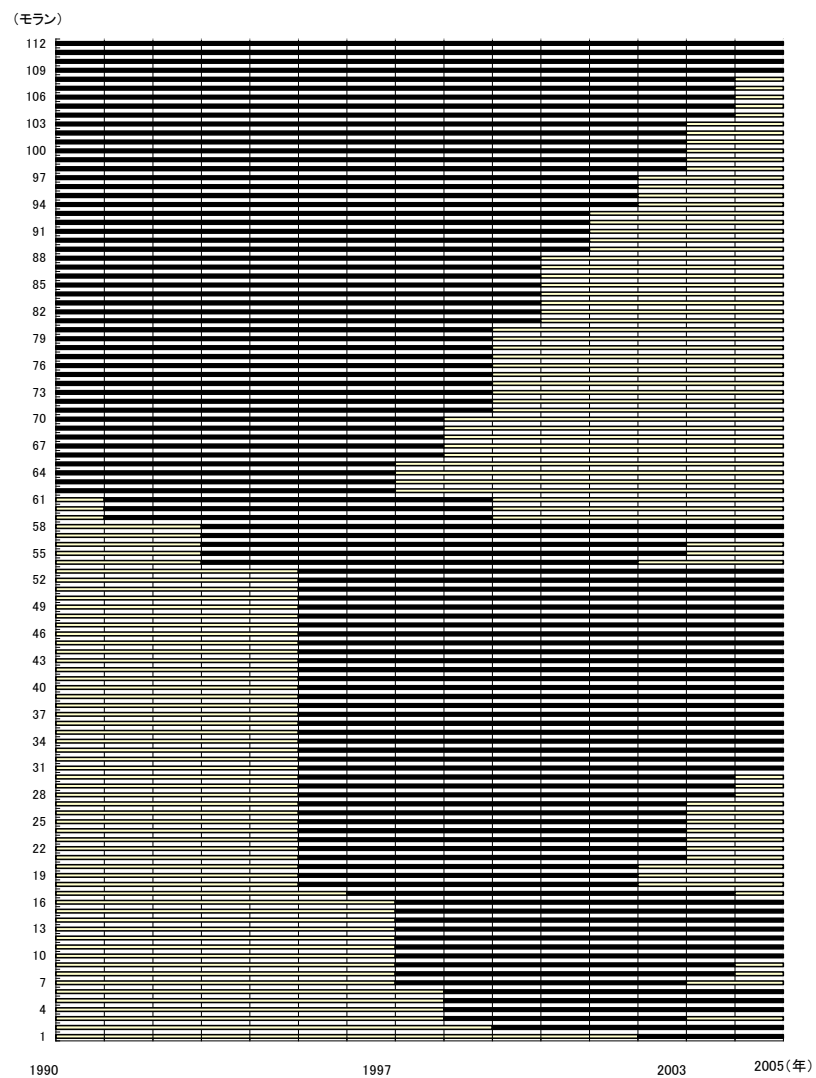


図2-2. 高地と低地のモランのモラン期の長さ(モーリ年齢組)

は、高地のモランの振る舞いと自分たちを比較したうえで、「伝統的」「集団的」であることを積極的に選択していると言えるだろう。この現象は、1998年以降、高地の結婚したモランが装飾をとりはじめたのと同時に、低地のモランがどんどん装飾を派手にしていったことにもあらわれていた。

2-7. 結論：「モランである」というアイデンティティの再定義

サンプルにおける高地と低地の差異は、一方では、生態学的な差異として存在し、それは、あるていど降雨にめぐまれ、一部では農耕も可能な高地と、暑く乾燥しており牧畜につよく依存している低地という違いであらわれている。また、他方では、外部からもたらされた差異として存在し、高地には学校や開発プロジェクトが集中するなどといったかたちであらわれている。こうした環境のもとでサンプルの年齢体系をめぐる文化的・社会的な実践には、「進歩的」で「非伝統的」な高地と「サンプルらしく」「伝統的」な低地という地域的な分節が発生し、人びとのあいだには、「高地人」と「低地人」というふたつのアイデンティティが対立するかたちで構築されるという現象が進行していた。

「高地のモラン」と「低地のモラン」は、装身具のデザインにおいてもその差異を表現しながら、さまざまな行為において、つねに自他のあいだの差異を意識化している。そのうえで、今日のモランたちは、自己をポジティブに評価しながら、「モランをやめる」「モランをやる」という選択肢を意識的に選び取っていると見ることができるだろう。

年齢体系の実践を表面的に見ると、高地では年齢体系が消滅もしくは形骸化の方向にむかって変容しており、低地ではその流れが単に遅れているという見方もできる。しかしながら、人びとの意識のなかでは、みずからが能動的な選択をしていると自覚しているという点において、低地にも高地におとらぬ大きな変化がおきている。そして、こうした能動的な選択によって、「モランである」というアイデンティティが高地と低地で異なって定義されるようになってきているのである。年齢体系は、その実践における差異を自他のあいだで確認する指標を人びとに与えることにより、アイデンティティの構築基盤としての役割を担いつつあるということができるだろう。

3. 新たな民族アイデンティティ『マサガラ』の出現：北ケニア牧畜民アリアールが経験したふたつの選挙（内藤直樹）

3-1. はじめに－2007年ケニア総選挙と民族間の対立

2007年12月27日のケニア総選挙は、国内に大きな混乱をまねいた。ケニア西部地域やコーストおよびナイロビなどで発生した暴動により1000人以上の死者や数十万人の避難民が発生した。このとき私は、ナイロビから北に400kmほど離れた、いわゆる周縁地域の牧畜民を対象にしたフィールドワークをおこなっていた。ここでは暴力的な紛争こそ起こらなかったものの、調査地が含まれる選挙区での選挙運動にコミットする人びとが、新たな民族アイデンティティを主張した。国会議員選という政治的資源をめぐる「民族間の戦い」は、これまで協同的な関係を構築してきた牧畜集団間に対立的な関係を生じさせた。

ケニアでは、1992年の複数政党制の導入以降、各地で民族主義が創造・再創造され、集団間の対立・紛争が頻発している（松田2004など）。また、これまで国家の外側に位置していたケニア北部の牧畜社会が、選挙を通じて国家に組み込まれていく過程が報告されている（曾我2002）。それらによれば、こうした経験を経た社会は、それ以前の多様な差異を内包した柔軟な文化共同体から、均質で固定的な文化・政治共同体に再編されたと結論づけている。

本報告では、ケニア北部・マルサビット県・ライサミス選挙区において、今回の2007年総選挙の選挙運動時に「マサガラ」という新たな民族アイデンティティが出現した事例にもとづき、政治的資源をめぐる民族アイデンティティが本質化される過程を検討する。まずマサガラを名乗った人びとの特徴や、この地域の政治的状況を概観した後で、選挙やそれに関連した開発が北ケニア牧畜社会の人びとの集団間関係やエスニシティにどのようなインパクトを与えたのかを分析する。

3-2. 誰が新たなアイデンティティを主張したか

牧畜民アリアールと「マサガラ」

「マサガラ」アイデンティティを主張した人びとは、先行研究（Spencer 1973, Schlee 1989, Fratkin 1986, Falkenstein 1995など）においてアリアールあるいはアリアール・レンディーレと呼ばれてきた。アリアールは、ナイロート系言語を話すウシ牧畜民サンプルと、クシ系言語を話すラクダ牧畜民レンディーレの混成集団である。サンプルやレンディーレにはそれぞれ独自の年齢体系と分節出自体系が存在する。ところがアリアールは独自のものはもたず、レンディーレやサンプルの体系を借用している。また、アリアールでは、サンプル語とレンディーレ語の両方が話されている。しかし、近年は、多くの人がサ

ンブル語で日常会話をおこなうようになってきている。

アリアール、サンプル、レンディーレ社会には複数の父系クランが存在する。基本的にクランが外婚単位になっている。アリアールとレンディーレでは、クランは居住単位にもなっており、人びとはクラン集落に居住している。レンディーレのクラン集落は、ほとんど同一クラン員で構成されている。しかしアリアールのクラン集落には、他のクランやレンディーレの成員も多く含まれている。

先行研究でもちいられてきた「アリアール」という呼称は、レンディーレによる他称である。そして、「アリアール」に相当するサンプル語は「マサガラ」である。少なくとも2004年の時点までは、「マサガラ」という単語を知っているのは、一部の老人だけだった。

アリアールは民族の境界で、場面や状況に応じて、相手と交渉しながら自らのアイデンティティを表明してきた。もともとアリアールは、「サンプルとレンディーレの間のどこか」に存在するゆるやかな文化共同体 (Spencer 1973) であったと考えられる。しかし2007年の総選挙時に、一部の若者が「自分たちはレンディーレと明確に異なる民族集団「マサガラ」である」と主張した。

ケニアの選挙システムとライサミス選挙区

ケニアでは5年おきに総選挙がおこなわれる。総選挙では大統領選と同時に国会議員選がおこなわれる。国会議員は210に区切られた小選挙区ごとに選出される。マルサビット県の南部に位置するライサミス選挙区の住民の多くはレンディーレとアリアールで、それ以外には少数のサンプルとトゥルカナが居住している。図3-1は、ライサミス選挙区内の行政区分の中心的な町の位置を示している。コルとカルギ周辺にはレンディーレが、ロゴロゴ、ライサミス、メレレ、ングルニット周辺にはアリアールが居住している。サウスホールとクラル山には少数のサンプルが、ロイヤンガラニには少数のトゥルカナが居住している。



図3-1. ライサミス選挙区と選挙内の町の位置

3-3. 地方分権化が地域社会に与えたインパクト

2003年にケニア政府は、CDF (Constituency Development Fund) ・ 選挙区開発基金を導入した。CDFは選挙区の開発を目的とした地方分権的な資金配分システムであり、現時点では政府歳入の2.5%が支出されている。政府歳入から交付されたCDFは、210の選挙区ではほぼ均等に配分される。選挙区に配分されたCDFの使途は、その選挙区の委員会が決定する。委員会のメンバーは、選挙区の国会議員を中心に、公務員、NGO関係者、地域住民の代表などで構成されている。それゆえ、CDFは国会議員の政治的資源になっているという問題点がなんども指摘されている（笹岡2007など）。

表3-1はライサミス選挙区内の地域ごとの、CDF関連プロジェクトで使用された金額の変動を示している。アリアールが居住する地域に対するCDFの投入額は、CDFの発足以来、右肩上がりに伸びている。これは、CDFの導入以前に、レンディーレが多く住むコルやカルギといった町場には、すでに診療所や学校、水場があったことに関連していると思われる。すなわち、アリアールの住む町場や集落には、これまで行政サービスがほとんど行き届いておらず、CDFの導入後ようやく、診療所や学校、水場が建設され始めた。CDFはアリアールの人びとが切望していたさまざまな設備—診療所・学校・掘りぬき井戸など—を提供し

た。アリアールの人びとは、CDFの導入以降、これまで望んでも叶えられることがなかったさまざまな設備がつぎつぎと建設されるのを目の当たりにして、驚愕した。それは同時に、CDFが、国会議員の「力」を人びとに見せ付けることができる強力な政治的資源になることも意味していた。

表 3-1. ライサミス選挙区におけるCDF配分額の推移（地域別）

Year	アリアール地域	レンディーレ地域	サンプル・トゥルカナ地域
2003	1,620	1,250	6,300
2004	5,300	4,750	2,182
2005	10,200	5,300	5,700
2006	14,133	5,800	5,050

注1: Constituencies Development Fund: <http://www.cdf.go.ke/>より作成

注2: アリアール地域はメレレ、ライサミス、ロゴロゴ、ングルニット、イラウトを、レンディーレ地域はコル、カルギを、サンプル・トゥルカナ地域はロイヤンガラニ、クラル山、サウスホールからなる。

3-4. 2006年国会議員補欠選挙—新たな選挙戦術の導入

「キャンペーン」から「コミッティ」へ

ライサミス選挙区を含む北ケニアの複数の選挙区では、2006年7月に国会議員の補欠選挙がおこなわれた。北ケニアの民族紛争の調停に向かった現職国会議員たちが飛行機事故で死亡したためである。死亡したライサミス選挙区の国会議員はレンディーレ出身だった。多くの人びとは、補欠選挙の勝者は死亡現職の国会議員の妻ロイリロ・マリー氏だと予想していた。ところが開票してみると、アリアール出身の新人・ジョセフ・レクトン氏が国会議員の座を勝ち取った。

ここからは、2006年の補欠選挙から今回の2007年末の総選挙までの期間に、アリアール出身の国会議員レクトン氏と彼の選挙運動員が、政治的資源や言説をいかにもちいて、人びとを動員したのか検討する。

まず2006年の補欠選挙以前は、誰に投票するかは、クラン集落の長老会議によって決められていた。それゆえ候補者は、レンディーレやアリアールのクラン集落を訪れると、長老会議を招集し、演説をおこなっていた。また、その際、候補者は長老たちに現金や砂糖、タバコといった心づけを提供していた。この心づけは長老たちが平等に分配していた。こうした選挙活動は「キャンペーン」と呼ばれている。この時点までは、人びとは選挙にあまり関心をもっていなかった。また、誰に投票したかが問題になることも少なかった。

しかしながらレクトン氏は、2006年の補欠選挙の際、まったく新たな選挙戦術を導入した。彼はクラン集落ごとに数名の運動員を選んで、「コミッティ」と呼ばれるものを結成さ

せた。そしてコミッティのメンバーは、水面下での選挙運動を展開した。聞き取りによれば、補欠選挙のときの「キャンペーン」では、マリー氏はM集落の長老に40,000kshを与えたが、レクトン氏はわずか5000kshしか与えなかった。しかしながらレクトン氏は、密かにM集落に「コミッティ」を組織し、メンバーに20,000kshの勧誘資金を渡し、水面下で集落住民の勧誘をおこなわせた。「コミッティ」のメンバーの大部分は、初等―中等教育やナイロビに出稼ぎの経験がある若者だった。

補欠選挙の開票結果が出るまで、多くの人が、マリー氏が勝利すると考えていた。なぜならレンディーレとアリアールの多くの長老たちは、「私たちの国会議員の任期中は、彼の妻にやらせよう。そしてつぎの2007年の選挙のときに、新たな国会議員を選ぼう」と表明していたからである。ところが開票の結果、大方の予想を裏切って、マリー氏の約5000票に対し、レクトン氏は約6000票を獲得し、レクトン氏が勝利を収めた。この結果は、レンディーレの長老におおきな衝撃をあたえた。そして多くの人びとが、このときはじめて「コミッティ」の存在を知った。

コミッティ・システムの成功理由は、アリアールの集団構成の複雑さに関連していると考えられる。アリアールのクラン集落は、「クラン共同体」という体裁をとっているものの、内部にアリアールの他のクランやレンディーレのメンバーを多数含んでいる(内藤2004a)。これまでは長老会議によって、言説レベルでは「クラン全体の意思決定」がなされてきたが、帰属を異にする人びとをふくむアリアールのクラン集落内には、異なる意見や立場の人も多かった(内藤2004b)。各クラン集落のコミッティのメンバーは、そうしたクラン共同体のグランド・ナラティブに対する、個別の住民の立場や思惑の違いを熟知しており、人びとを個別に説得していったのである。

新たな選挙戦術・コミッティ・システムがアリアールの地域社会に与えた影響について検討する。これまで人びとは、長老会議の決定に従って投票してきた。しかしながら、「コミッティ」は、長老にかわって教育や都市での経験のある若者の選挙に対する影響力を増大させた。それはクラン共同体の中で長老が果たしてきた伝統的な役割を弱体化し、人びとの意志決定プロセスも断片化・個人化していった。その結果、選挙に関連した集落内の紛争によって、アリアールやレンディーレの複数のクラン集落が分裂するという事態も生じていた。

国民登録の推進による有権者の創出

レクトン氏は、補欠選挙時にもうひとつ画期的な新選挙戦術を発明した。それはアリアールの国民登録の推進による、有権者数の増加戦術である。彼は補欠選挙の選挙運動時に、「レンディーレは子供でもID・国民登録証をもっている」「しかしわたしたちはどうだ？多くの人がIDをもっていない」「だからレンディーレはこれまで選挙に勝ってきた」「もし私が国会議員になったら、まず、みなさんにIDを与えることを約束しよう」そして「レンデ

イーレに支配されたままの状況をぬけだそう！」と発言した。これまでアリアールの人びとは、町のオフィスで煩雑で長期にわたる手続きをしなければIDは取得できなかった。そのためIDを持っている住民は少数だった。人びとは都市部への出稼ぎなど、IDが必要になる時には、他人のIDを借りていた。ID登録をしていない住民は選挙権をもっていない。レクトン氏は国会議員になると、ID登録の役人を、ライサミス選挙区内のさまざまな場所に派遣し、アリアールのID登録を推進した。

その結果、ライサミス県の有権者数が急増した。表3-2は、ライサミス県でおこなわれた2002年、2006年、2007年の国会議員選挙における有権者数を示している。2006年から2007年までの一年間で、有権者数が約7000人も増加している。調査地では、増加分のほとんどはアリアールであると、ささやかれていた。レクトン氏は、アリアールの有権者を増やし、ライサミス選挙区における政治的マイノリティだったアリアールを、マジョリティに変えようとしたと考えられる。

表3-2. ライサミス選挙区における有権者数の推移

選挙がおこなわれた年	有権者数（人）
2002	14,087
2006	15,610
2007	22,411

注1: Electoral Commission of Kenya: <http://www.eck.or.ke/>より作成

3-5. 2007年国会議員選挙と「マサガラ」アイデンティティの出現

「敵」の創出と呼びかけ

ここでは2007年の総選挙における選挙運動によって、レンディーレとは明確に異なる「マサガラ」アイデンティティが出現した過程を説明する。

2007年の総選挙では、アリアール出身のレクトン氏を与党・国民統一党(PNU)が支持、そして野党・オレンジ民主運動(ODM)がレンディーレ出身の候補者アブバカル・ハルグラ氏を支持し、熾烈な選挙運動を展開した。2006年の補欠選挙の一年後に総選挙があることは、最初からわかっていた。このため選挙戦は、補欠選挙終了直後からはじまっていた。今度は、すべての候補者がコミッティを作った。コミッティは、アリアールやレンディーレのクラン共同体内部のさまざまな差違を政治化した。こうした選挙の長期化によって、アリアール対レンディーレという構図が先鋭化した。そして民族主義的な言説が動員された。

アリアールの選挙運動員は次のような演説をおこなった。「これまでのレンディーレの国会議員は、私たちの陳情を聞いてくれなかった。なぜなら私たち「マサガラ」はサンプル語を話す、レンディーレ語はうまく話せない。だから私たちの言葉で直接対話するこ

とができる国会議員が必要だ」「私たち「マサガラ」の候補者を国会議員にして、これまでレンディーレが独占していた掘り抜き井戸を掘ってもらおう！」。

このように、2007年の総選挙におけるアリアールの演説には「マサガラ」という単語が頻出する。アリアールとレンディーレは密接な歴史的関係があるし、現在も混在しているため、ある要素だけを取り出して両者を明確に区分することは難しかった。しかし運動員は、「レンディーレとは異なるわたしたち」というカテゴリーを創造するため、アリアールとレンディーレの言語の差違に注目した。それは実態とは異なるのだが、レンディーレに対して「サンプル語を話す、サンプル文化の担い手としての私たち」というかたちでの差異化をこころみた。これまでのレンディーレ語の他称、アリアールにかわって、忘れかけられていたサンプル語のマサガラという他称がリバイバルされるに至ったのは、そうした理由によるものだと考えられる。

また運動員たちはCDFが「レンディーレによって不正に使用されてきた」ことも示唆していた。実際にはすでに示したように、CDFはアリアールの地域に重点的に用いられており、彼らの発言は的を得ていない。しかしながら、この発言は、レンディーレにくらべて冷遇されてきた政治的マイノリティ・マサガラというアイデンティティを創り出すためには、十分役立った。このようにしてレクトン氏の運動員は、政治的資源をめぐる民族主義的な対立構造を先鋭化させていった。一方でアリアールの国民登録を進め、政治的なマジョリティ化をはかりながらも、他方でこうした言説を用いて「政治的マイノリティ・マサガラ」というアイデンティティを創造し、人びとを動員しようとした。

さらにレクトン氏はこのときの演説で、投票カードを武器に、選挙を戦いにたとえた。「この槍で、レンディーレと戦おう！」。これまでアリアールは、レンディーレやサンプルを「異民族」ではなく「異母兄弟」あるいは「他クランの人」と認識していた。「異民族」とはトゥルカナやボラナやソマリのような、殺害することが名誉であると認識される人びとである。一方、サンプルやレンディーレの殺害は、アリアールを殺害した場合と同じ非難の対象である。また「槍」とは、「異民族」との戦いに用いる武器である。つまり彼は、レンディーレは殺害すべき「異民族」であり、「マサガラ」であるあなたは、レンディーレに勝利するための戦い、すなわち投票に行かなければならないと呼びかけた。

各選挙時の投票率を見ると、2002年が57%だったのに対して、2006年が72%、2007年には78%と上昇していた。その一方で、当選者の得票率は、2002年が83%だったのに対し、2006年と2007年はともに50%程度だった。すなわち、レクトン氏に呼びかけられた「マサガラ」の人びとは、「レンディーレ」との政治的資源をめぐる戦いに身を投じていったと考えられる。最終的にレクトン氏は10001票、ハルグラ氏が7189票を獲得し、レクトン氏の再選が決定した。

「マサガラ」の領域的基盤獲得の可能性

くわえて2007年の総選挙時には、今後マサガラが領域的基盤をも獲得するかもしれない事態が生じていた。2007年12月にケニア共和国の建国以来はじめて、遊説のためライサミス選挙区に大統領がやってきた。キバキ大統領はレンディーレが数多く住む町・コルを訪問し、演説をおこなった。このときに大統領は、ライサミス選挙区を県に昇格させることを約束した。この約束は、すみやかに実行に移された。2007年12月中旬には、ライサミス町に、既存のブロック・ハウスを借り上げただけのその場しのぎのものであるが、「ライサミス県庁オフィス」が開設された。

とはいえ、オフィスには公務員がひとり派遣されているだけで、実質的に機能していないので、大統領の選挙用のリップサービスに終わるかもしれない。しかし、もしこれが実現すれば、今後アリアルとレンディーレは、独自の地方自治をおこなうことが可能になる。そして2007年の有権者数の増加を考慮すれば、この新しい「県」の政治的マジョリティは「マサガラ」になることも考えられる。

3-6. 選挙後の対立の解消にむけた人びとの努力

これまでアリアルとは、「レンディーレとサンプルの間のどこか」にあるゆるやかな文化共同体であった。しかし2006年と2007年の二つの国会議員選挙において、アリアルは、1) サンプル文化の担い手「マサガラ」という明確な輪郭をもったアイデンティティの創出し、2) ID登録の推進によって成員を確保し、3) ライサミス県の新設による民族ベースの地方自治の可能性を獲得した。こうしたことを考慮すれば、2007年のケニア総選挙にともなう「マサガラ」という新たな民族アイデンティティの出現は、CDFの運用力を掌握する国会議員という政治的資源をめぐるはげしい戦いによって、サンプルとレンディーレの境界におけるゆるやかな文化共同体・アリアルが、アイデンティティ、成員、領域を備えた文化・政治共同体「マサガラ」として再編される過程の一部だと考えられる。

2007年の大統領選を契機に生じた与野党間の対立は、2008年4月の段階で、いちおうの「和解」にいたった。さまざまな和解項目のひとつに、本来の5年より早い段階で総選挙をおこなうというものがある。それが現実のものとなった場合、選挙運動はさらに継続し、マサガラ・アイデンティティはより強化される可能性がある。

しかしながら、選挙直後のアリアルの人びとの行動を思い出すと、必ずしもそうした展開にはならないかも知れない。2006年から2007年末にかけての約2年にわたる長い選挙運動が終わったとき、人びとは先鋭化したマサガラ・アイデンティティや、レンディーレとの対立的な関係を再びゆるやかなものに「修復」しようと努めているようにも見えた。

選挙直後の2008年2月に、私はアリアルのあるクラン集落の長老に、集落の家族の移住史についてインタビューしていた。そのクラン集落は2007年に「アリアル系」と「レンディーレ系」のふたつに分裂していた。長老は、分裂したクラン集落の家族Xの移住史について言及する際、躊躇した。アリアルでは、いまクラン集落と一緒に住んでいる人の

「もとの出自」を暴露することは、その人の他者性を強調してしまうため、避けられているからである。

ところが、その場で、老人の躊躇を見ていた若者は、老人に対して「言っしまえ、隠すことは何もない」「私たちマサガラはマサガラの候補者に投票するべきだ。しかし、分裂したX家はもともとレンディーレである。だからレンディーレの候補者を支持するのだ」と発言した。

長老が、クラン集落の分裂後もなお、自他の差異を隠蔽しようとしたことは、選挙によって先鋭化したマサガラとレンディーレの対立関係を修復しようとしているようにも考えられる。その一方で、教育を受けた若者たちは、まるで選挙中のように実にたやすく「差異」を政治化して見せたのである。

こうした選挙後の長老と若者の間の「差異への態度」の差異を考えれば、2006年と2007年のふたつの選挙によってアリアルルの共同体の性質が文化・政治共同体へと根本的に変化したかどうかは、まだよくわからないというのが妥当かもしれない。

ケニアにおける小選挙区・複数政党制という選挙システム、そして近年のCDFの導入による地方政治と開発の直接的な結びつきを考慮すれば、今後、ケニアの210ある選挙区のそれぞれが、政治・経済的資源をめぐって、さまざまな言説やイデオロギーを駆使した戦いの場になると言えるだろう。アフリカにおける民主主義の導入に際しては、選挙に関連して生ずる対立構造や暴力をいかに解消できるかが重要である。そのために、アリーナとしてのケニアの選挙区の民族誌的な比較研究おこない、民主主義的な体制のもとで、1) さまざまな差異や集団カテゴリーがいかに本質化されるか、そして2) 差異の本質化によって切断した相互行為を回復に向けた人びとの実践を解明する必要があると考えられる。

参考文献

- Baxter, P. T. W. and Uri Almagor, 1978. Introduction. In P. T. W. Baxter and Uri Almagor eds., *Age Generation and Time: Some Features of East African Age Organization*. London: C. Hurst & Co., pp. 1-35.
- Falkenstein, M. 1995. Concepts of ethnicity and inter-ethnic migration among the Ariaal of Kenya, *Zeitschrift für Ethnologie* 120: 201-225.
- Fratkin, E. 1986. Stability and Resilience in East African Pastoralism: The Rendille and Ariaal of Northern Kenya, *Human Ecology* 14(3):269-86.
- Gulliver, P. H., 1968. Age differentiation. In *International Encyclopedia of the Social Sciences, Vol. 1*. New York: Macmillan, pp. 157-162.
- Holtzman, Jon David, 1996. *Transformations in Samburu Domestic Economy: The Reconstitution of Age and Gender-Based Processes of Production and*

- Resource Allocation among a Kenyan "Pastoral" People*. Ph.D. thesis (anthropology), University of Michigan.
- Holtzman, Jon, 2004. The local in the local: Models of time and space in Samburu district, northern Kenya. *Current Anthropology*, 45(1): 61-84.
- Kasfir, Sidney L., 2002. Slum-dunking and the last noble savage. *Visual Anthropology*, 15: 369-385.
- Kasfir, Sidney L., 2004. Tourist aesthetics in the global flow: Orientalism and "Warrior Theatre" on the Swahili coast. *Visual Anthropology*, 17: 319-343.
- Kurimoto, Eisei and Simon Simonse (eds), 1998. *Conflict, Age & Power in North East Africa: Age System in Transition*. Oxford: James Currey.
- Schlee, Gunther, 1989. *Identity on the Move: Clanship and Pastoralism in Northern Kenya*. Manchester: Manchester University Press.
- Spencer, Paul, 1965. *The Samburu: A Study of Gerontocracy in a Nomadic Tribe*. London: Routledge and Kegan Paul.
- 1973. Nomads in Alliance: Symbiosis and growth among the Rendille and Samburu of Kenya. Oxford University Press, London.
- 1976. Opposing Stream and the Gerontocratic Ladder: Two Models of Age Organization in East Africa. *Man* 11: 153-174.
- 松田素二 2004 「変異する共同体：創発的連帯論を超えて〈特集〉共同体という概念の脱/再構築」、『文化人類学研究』69(2): 247-270.
- 内藤直樹、2004a 「牧畜民アリアールの複合的なアイデンティティ形成-『同一経験の共有』に基づく帰属意識形成の事例から」田中二郎他（共編）『遊動民-アフリカの原野に生きる』昭和堂、567-592.
- 内藤直樹、2004b 「『行為先行的な規範』と『同一経験の共有』との間の相互反照的な関係：北ケニア牧畜民アリアールにおける結婚開始儀礼の事例から」『アフリカレポート』39: 26-32.
- 中村香子、2004. 「『産まない性』—サンプルの未婚の青年層によるビーズの授受を介した恋人関係—」田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編『遊動民—アフリカの原野に生きる—』昭和堂、pp. 412-438.
- 笹岡雄一 2007 「ケニアの集権的体制と分権化」、『アフリカにおける地方分権化とサービス・デリバリー：地域住民に届く行政サービスのために』、独立行政法人国際協力機構 国際協力総合研修所、69-85.
- 曾我亨 2002 「国家の外側から内側へ—ラクダ牧畜民ガブラが経験した選挙」、佐藤俊編『講座生態人類学 4 遊牧民の世界』京都大学学術出版会、127-174.